歴史探訪

「うつくしま」への系譜

福島県立博物館展示

『会津農書』を著した 佐瀬与次右衛門が伝えた農業の原点

江戸時代中期になると、全国各地に『農書』と呼ばれる農業技術書が出現します。農業技術を体系化し、農民に普及させようと、この農書を会津の地で、全国的にも先がけて著したのが佐瀬与次右衛門（1630～1711）です。貞享元年（1684）に著された『会津農書』には、会津の農業の礎を築き、現代農業に大きな教訓を伝える技術と精神が込められています。ここでは、長年『会津農書』の研究に取り組む福島県立博物館専門学芸員の佐々木長生さんにお話を伺いながら、現代にも通ずる与次右衛門の「農業の原点」にふれてみました。

■農民の自立に求められたマニュアル

幕藩体制が固まり、石高制が基盤となる中、米の安定的な生産を図るために農業技術を体系化し、農民に普及していく必要から、元禄時代前後には多くの農書が著されました。日本の農書の代表といわれるのは宮崎安貞の『農業全書』ですが、これは中国の書を範として書かれたもので、各地の農書の多くは、この『農業全書』を下敷きとして書かれました。佐々木さんは、「これらに対して、与次右衛門が著した『会津農書』は、『農業全書』よりも十三年も古く、さらに会津という地に適した農業技術をオリジナルに研究し、会津の農業を体系づけたものでした。『会津農書』は、著者・著述年代・著述地が明確な農書としては最古のもので、学術的にも極めて貴重な書。国宝級と言っても過言ではないと思います」と語ります。

与次右衛門は、会津郡幕内村（現・会津若松市神指町）の肝煎（村の代表者、名主）で、村人を指導する立場にありました。農村が近世初期において、複合大家族制に基づく団体での農業を営んでいた中世的な村社会から、各々が独立して農業をする単婚小家族制の村へと変化する中で、安定した年貢をとるには、どの農家でも一定の成果をあげるための「マニュアル」が必要でした。そのマニュアルづくりに、与次右衛門はどう取り組んだのでしょうか。このことについて佐々木さんは、「彼は、農業の基盤である土壌や水を自ら実験・検証し、古くからの地域の言い伝えを大切にしながら、村内でも土地によって適性が異なる米作や畑作の作付体系を丹念につくっていきました」と話します。村内の各地に適する農業技術を確立し、農民の自立に役立てるために、与次右衛門は徹底して、地域の自然の特性や古く伝わる農業の経験則を洗い出し、体系化していったのです。

会津農書（写）　農書の中で与次右衛門は、水田を「郷田（里の田）」「山田」の二つに分類し、その上で稲を早稲・中稲・晩稲と、耕作時期をずらした栽培で冷害のリスクを最小限にとどめる工夫を施しました

佐瀬与次右衛門の農業指導図　～『会津孝子伝』より～（森俊一氏蔵）与次右衛門は約20年にわたって天候の記録をとるなどして、何日に種子籾を浸し、何日から田植えを始め、何日に除草、稲刈りを終えるかなど、模範となる作業工程を示しました

『会津農書』の内容を和歌に詠んだ『会津歌農書』と、与次右衛門と農民の対話をまとめた『会津農書附録』（佐瀬哲治氏蔵）。その写本は今も佐瀬家で大切に受け継がれています（円内は、今も残る佐瀬家に、与次右衛門の時代からあったと伝えられる庭）

旧会津郡幕内村

「米どころ会津」、それは冷害を克服する与次右衛門の農業技術があって、初めて確立したものでした。会津平野には、今年の秋も豊かな実りがやってきました（撮影地：会津若松市神指町）

■自らの体験が生み出した農書

与次右衛門がとりわけ心を砕いたのは、会津という厳しい自然条件のもとでの冷害対策でした。彼は、寒さのために実がならず、青いまま立ち枯れていく稲を見ながら、何とか稲が育つ方法がないかと考えました。そうして確立したのが、寒さに強い稲の品種を中心とした米づくりでした。彼はどの田にはどの品種が合うのか、何回も実験を繰り返し、山間の田、平野の田、土の性質など、村内でも条件が異なる水田に対し、各々に最も適した形で、早く実る稲、遅く実る稲などを計画的に取り入れて、寒さの被害を少なくするよう工夫したのです。これは、東北地方でなければ決して生まれなかった農業技術でした。

『会津農書』は、「田の部」「畑の部」「農家生活全般」の三部構成で書かれていますが、畑作については三十五種類にも及ぶ畑作物の耕作法や作付時期等が記されています。なぜこれだけ多くの畑作物を栽培する必要があったのか――農民は米のほとんどを年貢として納めており、自家消費用としての雑穀・野菜の栽培は、必要不可欠でした。また与次右衛門の村は、川にはさまれた扇状地で、水害で砂が入り込み、米作よりむしろ畑作に適した地でした。こんな背景から、彼は農民の生活に必要な作物を限られた土地で栽培するために、「いつ何を作るか」という農地活用のローテーションを確立したのです。農作物の栽培にあたって重要なのは、農地の地力と種まき時期ですが、「与次右衛門は、下肥などの自給肥料を十分に施し、耕作の時期については、自然の草木の変化によって知るよう教えています」と、佐々木さんは話します。ここからも、『会津農書』が彼の体験と実験報告、旧慣習による農法の総合的な技術の体系書であることがうかがい知れます。

農耕春秋図屏風（秋）（会津若松市蔵）　江戸時代の会津地方の農業の様子が伺えるこの屏風には、与次右衛門が農業指導をしていた頃に使われていた農具も描かれています。この頃の農具は、高度経済成長期を迎える前まで使われていました（左は、泥田地帯の田を田植え前に代踏みする「ナンバ」と呼ばれる田下駄の実演）

■現代に伝えたい農業の原点

与次右衛門はのちに著した『会津農書附録』の中で、農業指導の内容を絵図で示したり、さらに『会津農書』は一般の農民には難しい」という声を聞くと、その内容を和歌で親しみやすく詠んだ『会津歌農書』を著したりと、農民のために自分の知識を役立たせたいという想いは徹底していました。この精神は養子の林右衛門に受け継がれ、『幕内農業記』を著述させるに至っています。米どころ会津――今では当たり前のように思われているこの事実も、与次右衛門の熱い想いがその礎を築き上げたことを、忘れてはならないでしょう。彼の村・幕内はその後、若松城下への野菜供給地として発展し、「菜園場」と呼ばれるようになりました。幕内をはじめ周辺の集落は、この伝統を継承し、会津若松の台所を担う主要な野菜供給地となっています。

高度経済成長期以降、急激に農業の機械化が進みましたが、根本的な農業のやり方は、昔と変わっていません。佐々木さんは、「むしろトラクターで浅い耕し方を繰り返したり、化学肥料を使ったりして農地の地力を落としている現代の方が、昔よりも後退しているのかもしれません」と話します。与次右衛門は、「農民の家は単なる住まいではなく、作業場やたい肥の生産場でもある」と説きました。何物も使い捨てにせず、生活の場で作った肥料を農地に生かす――今日でいうリサイクルや有機農業の発想が、そこにはありました。また、与次右衛門の教えで一貫していたのは、自然に対する姿勢でした。ふる里の気候や風土を知り、自然に沿った生活やしきたりを大切にしながら、自然に対して謙虚になり、自然に逆らうことのない農業を営むことを、彼は繰り返し説いていたのです。

与次右衛門が著した『会津農書』の教えは、現代農業が失いかけていた大切なものを、もう一度わたしたちに思い起こさせてくれているのではないでしょうか。

佐瀬家周辺の家々には今も野菜の洗い場が残され、道沿いには水路があります

農書誕生の地、幕内の田畑　与次右衛門のお膝元・幕内は、城下の「菜園場」として野菜を供給し続け、現在も近郊農業が営まれています。与次右衛門の農業指導がそのまま受け継がれた情景が、ここにあります（奥の森の中には菩提寺の新城寺があります）

農民の家もまた生産の場ととらえた与次右衛門。「『家の庭には実のなる木を植えなさい』という与次右衛門の指導は、幕内の家の庭先にいまも受け継がれています」と話す佐々木さん

会津農書の碑（新城寺）与次右衛門の功績を称え、昭和43年に建立されました